

## 日本動物行動学会について

日本における動物の行動の研究は、近年急速にさかんになってきました。以前から行動の研究を進めてきた人々に加えて、多くの若い研究者がいろいろな動物の行動に関心をもち、次々と興味深い事実を明らかにしてきています。しかし、そのような研究者は、さまざまな学会に散在し、互いにほとんど交流もなく研究を続けているというのが現状でした。それにたいして、日本におけるエソロジーの一層の発展のためには、いろいろな学会に所属する動物の行動に興味をもつ人々が、動物の行動の問題に関して研究成果を発表し、存分に議論し交流できる場を保証することがぜひとも必要であるという認識が強まっていました。このような状況のもとに日本動物行動学会は1982年12月9日に設立されました。現在(1984年6月)日本動物行動学会は会長日高敏隆、副会長伊藤嘉昭のもとに、その会員数はすでに600名をこえています。この数はこの学会の設立が時宜を得たものであったことを示していると思われます。

エソロジーには、かつてティンバーゲンがのべたように、行動解発の至近要因、行動の個体発生、行動のもつ生存価そして行動の進化という問題が含まれています。特に行動の生存価および行動の進化についての問題は、近年行動生態学や社会生物学として生態学や動物社会学の研究者によって大きく発展してきました。日本動物行動学会は行動のリリーサーや学習などの問題から、これら行動生態学、社会生物学を含む分野の研究者の学会として組織されています。

大会は1982年京都、1983年京都とすでに2回行なわれています。大会はポスターセッションとフィルム・スライドセッションから構成され、両大会とも90題をこえる発表がなされました。このフィルム・スライドセッションは他の学会の一般講演のような調査や実験のデータを発表するものではなく、動物の行動に関する興味深いフィルムやスライドを紹介するもので、問題の設定やアプローチの方法の選択といった研究としてのステップの第一歩を踏み出す前にすでに研究対象そのものが面白いという動物の行動の研究の特徴をよく表しています。これは専門の研究者にだけでなく、動物の行動に興味をもつ一般の多くの人々に開かれている日本動物行動学会の重要な点であると思われます。

フィルム・スライドセッションにおける動物の行動そのものの紹介の他は、発表はすべてポスター形式で行なわれました。これは“存分に討論できる”という学会の趣旨によるものであり、また、原則としてすべての発表をみることができるよう会場をひとつだけにするという意図によるものです。ポスター発表はまだなじみのやすい発表形式ですが10-15分間にスライドが次々に出てくると違い図も表もじっくりとみることができ、発表者と近距離で討論できるという利点があります。会場では、発表者のいるポスターの前に常に人だかりができ、発表時間の3時間半はほとんど立ちずめで同じことを10回以上も説明したという発表者もいました。この大会の形式について、疲れたが議論を充分深めることができ、たいへん満足したという参加者が多かったようです。

発表の内容は行動の機構、個体発生、生存価そして進化と広い範囲にわたっていました。また対象となる動物の分類群も多岐にわたっており、日頃あまり接触することのない他の分類群の研究者と会い刺激を受けるよい機会となっています。これらの他に大会ではいくつかのラウンドテーブル(自由集会)がもたれ、動物の行動の研究について活発な議論がなされました。

日本動物行動学会ではもっとも重要な仕事の一つとして英文学会誌 *Journal of Ethology* の発行を行なっています。これはエソロジーとその周辺領域の研究報告を発表するためのもので、出版は年1巻、2冊となっています。すでに第1巻(1-2号、120ページ)が1983年に発行されており、まもなく第2巻の1号も発行される予定です。

第1巻(1-2号)「チビアシナガバチの社会行動：創設期の野外観察」、「日本産アシナガバチ類の行動生態学Ⅲ フタモンアシナガバチ創設雌が巣から離れる際の意志決定」、「掃除魚ホンソメワケベラに対するニセクロスジギンボの攻撃擬態についての再検討」、「日本産アシナガバチ類の行動生態学Ⅳ. Ergonomic stageにおける女王と働きバチのエソグラムの比較」、「野性チンパンジーの食事メニューにおける動物性食物：なぜ異文化間変異か?」、「飼育下のツル類数種における配偶行動の観察」、「ミツバチの花選択：食物価と花密度の効果」、「タンザニア、マハレ山塊における野生チンパンジーの機会的配偶

と限定的配偶」, 「マドジョウの摂食行動」, 「ホンヤドカリにおける新しい殻の入手」, 「トゲオオハリアリにおける引っ越しの仕組み」, 「エチオピア, Omo 国立公園における夜行性食肉類の活動パターンおよび行動圏」, 「ユスリカ幼虫の煙突建て行動」, 「ひとつの巻貝に入る2個体のホンヤドカリ」, 第2巻(1号)「均質およびパッチ状の餌条件下におけるナナホシテントウの幼虫の探索効率」, 「ヤマトオサガニの二型の共存域」, 「カイコガの婚礼ダンスを支配する神経機構についての損傷法による研究」, 「新大陸熱帯産アシナガバチの社会行動と社会構造」, 「ホンヤドカリが背負っている殻の質: どのくらいヤドカリが自分の殻に満足しているか」, 「セスジユスリカの群飛と交尾: 群飛と交尾のタイミングの季節変化」,

「タヌキにおけるためふん場の利用とふんの認知」, 「霊長類におけるAllianceの進化: 集団遺伝学的モデル」, 「早期性転換: Centropyge 属のエンゼルフィッシュのとり得るもう一つの繁殖戦略」, 以上です。

今後レベルの高いものを定期的に発行し, 国際的な雑誌にしていきたいと考えています。すでに海外で提出された問題の設定にとびつき研究を進めていくかたちの, 欧米に追いつき追いこせという発想ではなく, われわれの研究の中から新しい問題を提出し, 日本動物行動学会をそのオリジナルな考え方を展開していく場としていくことが望まれています。(近)

(生物科学ニュース 1984年9月号より)

## 鳥屋のみた動物行動学会

上 田 恵 介

第2回日本動物行動学会大会は12月9~11日にかけて, 京都大学理学部で開かれた。鳥の行動生態学をやっているものとして, 当然出なければならない学会ではあるが, それ以上に昨年, この同じ場所で開かれた第1回設立大会のおよそ“学会らしくない”気どらない雰囲気が入って比叡おろしの吹く, 師走の京都へいそいそと出かけていった。大会では70のポスター発表, 17のフィルムセッション, そしていくつかのラウンドテーブル(自由集会)が行なわれた。鳥の分野の発表は全部で13(ポスター11, ビデオ1, スライド1)あり, 全体に占める割合は10%から15%へと鳥屋が若干進出した。

ところで, 学会に参加して印象深く思うのは, 議論を充分深めることができ, 疲れが心地よいものになることである。それはポスター発表を主軸とした, この大会の運営の仕方にある。つまりポスター発表すると, 言いつばなし, 聞きつばなしではなく, その場その場で質問して, それに充分答えてもらえるからである。これは発表者にとっては, いい加減なことを書けないという意味でつらいが, 非常に勉強になる形式である。高名な先生も若い人と同じ輪の中で議論をたたかわせている。

フィルムセッションでコシジロウミツバメがエコロケーションをしているらしいという発表をした吉田昭彦さんと懇親会で話し合う機会があった。コシジロウミツバメは夜, コウモリのようにヒラヒラと飛ぶ。あのヒラヒラとした動作が音響定位にかかっているのではないかというのが, 彼の研究の出発点だそうだ。それでは他のウミツバメ類はどうだろう。ヨタカの飛び方もそう言われれば変だ。生物物理屋の発想には我々も大いに学ぶべきところがある。3日目の午後, ティーパーティのあと「鳥のボーカルコミュニケーション」をテーマにラウンドテーブルがもたれた。参加者25名, 動物学教室のセミナー室は満員の盛況であった。ホオジロ(明石全弘), ヴチャマシマセンニュー(永田尚志), ウグイス(百瀬浩), それぞれの囀りについて話題提供が行なわれ, 討論がなされた。野外における音声の記載的研究と, 一方ですすみつつあるホルモンや神経生理学的研究のあいだのギャップをどう埋めていくのかが, 鳥の音声研究者にとっての今後の課題となるであろう。

ともあれ, 我々が鳥屋というせまいカラにとじこもらずに, 虫屋や魚屋やサル屋さんたちと話ができて, そこから研究のヒントが生まれるという点で, 今後とも参加していきたい学会のひとつである。発足後1年で会員数600名。欧文誌「Journal of Ethology」を出すまでになっている。(鳥学ニュース, No.13)

## 日本動物行動学会会則（案）

### 総 則

- 第1条 本会は日本動物行動学会（Japan Ethological Society）と称する。
- 第2条 本会は動物行動学の発展を図ることを目的とする。
- 第3条 本会は前条の目的を達成するために、次の事業をおこなう。
1. 研究発表機関としての英文学会誌、連絡・情報交換手段としての Newsletter その他の出版物の編集・刊行。
  2. 研究発表・討論の場としての大会・研究会の開催。
  3. 講演会の開催その他本会の目的に沿った諸事業。

### 会 員

- 第4条 本会の会員は一般会員、学生会員、海外会員、団体会員とする。
- 第5条 会員は会誌・Newsletter の配布を受けるとともに本会の運営と諸事業に参加することができる。
- 第6条 会員は定められた会費を納入しなければならない。納入しない時は第5条の権利は停止される。

### 運 営

- 第7条 本会は会長1名、副会長1名、運営委員若干名で構成する運営委員会により運営される。会長は運営委員会の議長となる。会長と運営委員は会員から選出され、副会長は運営委員の互選による。事務には運営委員会により指名された事務局員若干名があたる。
- 第8条 総会は本会の議決機関であり、会則の変更、会費の変更その他運営委員会が提案する事項などを議決する。議決は総会出席者の過半数による。
- 第9条 会計は会員から選出された2名の会計監査員の監査を受ける。会計年度は毎年1月1日に始まり12月31日に終わる。
- 第10条 会長、副会長、運営委員、会計監査員の任期は2年とする。

## 付 則

第1条 会費は次のとおりとする。

一般会員 5,000円 学生会員 3,000円 団体会員 8,000円

海外会員については上記金額に3,000円を加える。

第2条 学生会員には研究生等も含める。学生であることの証明はいらない。

第3条 会費以外に金額の多少を問わず寄付を受け学会の運営に資する。

第4条 本会則は1982年12月 日より施行する。

本学会の事務局は京都大学理学部動物学教室内におく。入会・退会その他の連絡は、

〒606 京都市左京区北白川追分町

京都大学理学部動物学教室内

日本動物行動学会事務局宛 お願いします。

## 大会の概要

1. 本学会の大会は、原則として毎年一回開催し、その際総会をもつ。
2. 大会の会期は当面2日間とし、じっくり討論ができるような形式にする。また、シンポジウムやフィルム・スライドセッションも織り込む。懇親会を開く。
3. 発表された研究の要旨(和文)は、後日Newsletterに収録する。

尚、第一回大会は1982年12月初旬、京都で開催する予定です。大会の案内は入会された方におって郵送致します。

日本動物行動学会 設立世話人名簿

氏名	所属学会	研究テーマ
青木重幸	昆虫学会	アブラムシの殺し合い
伊沢雅子	生態学会	ネコの生態
市川俊英	応動昆	ウンカ・ヨコバイ類のコミュニケーション
糸魚川直祐	プリマテス研究会	ニホンザルの行動と個体史*
今泉吉晴	動物学会	小哺乳類の生活の行動学的研究*
今福道夫	動物学会	ヤドカリの行動
今村伸児	生態学会	アリの社会行動とその進化
上田哲行	生態学会	トンボ類の進化生態学
梅澤俊一	動物学会	魚類の酸素消費量に及ぼす群効果 魚類のシエルターへの侵入行動
浦野明央	動物学会	無尾両生類の繁殖行動の神経内分泌機構
榎本知郎	人類学会	霊長類の性行動
大口修	動物学会	ミツバチの採餌行動
大崎直太	個体群生態学会	モンシロチョウ属3種の生態比較
大場信義	昆虫学会	ホタル類のコミュニケーション
小野知洋	応動昆	昆虫の配偶行動
小原嘉明	動物学会	カイコガの婚礼ダンスの神経機構
川崎健次郎	応動昆	昆虫性フェロモンの機能の解析
川道武男	生態学会	哺乳類の比較生態学・比較社会学
岸由二	魚類学会	ハセ類の性的二型と繁殖習性
北野日出男	昆虫学会	ヤドリバチ・カブラハバチの生物学
北村奥彬	応動昆	昆虫の行動の化学的解析*
木村武二	動物学会	マウスの嗅覚コミュニケーションとホルモン
窪田金次郎	解剖学会	脊椎動物の顎運動機構
黒田末寿	国際霊長類学	霊長類の社会行動
桑村哲生	生態学会	沿岸魚類の社会構造と婚姻組織
佐々木正己	応動昆	昆虫の日周期行動
城田安幸	昆虫学会	眼状紋の起源と進化, 昆虫の適応色彩 <sup>(他)</sup>
菅原和孝	人類学会	狩猟採集民ツィンジャンのソシオ・エノロジー, <sup>ヒト類の</sup> エノロジー
杉本毅	応動昆	ハモグリバエにつく寄生蜂の生態
杉山幸丸	生態学会	ヒトとサル eco-ethology
鈴木芳人	昆虫学会	寄生蜂の産卵様式

氏名	所属学会	研究テーマ
須永 哲雄	生態学会	淡水魚の摂食生態
高木 正見	応動昆	天敵昆虫の生態学
高橋 正三	応動昆	昆虫の化学コミュニケーション
椿 宜高	生態学会	昆虫の集合性
富樫 一巳	応動昆	マツノマダラカミキリの生態
中嶋 康裕	動物学会	ラニに寄生するテッポウエビの行動生態学・生態学
中村 司	鳥学会	鳥類の渡りの生理生態
中村 浩志	鳥学会	ライチョウの社会構造, カッコウの社会構造
西田 利貞	人類学会	テンパンジーの生態
西平 守孝	生態学会	さんご礁とさんご礁生物の生態
西邨 顕達	人類学会	新世界ガルの生態
橋本 正雄	鳥学会	オオセグロカモメの繁殖行動
長谷川 博	生態学会	海鳥の生活史, 生態, 行動
樋口 広芳	鳥学会	陸鳥の生態と行動
平井 一男	応動昆	畑作害虫に係る生物現象
平野 義明	生態学会	軟体動物, 腔腸動物の繁殖生態*
福土 尹	動物学会	ハエの行動と学習
藤崎 憲治	応動昆	サトウキビ害虫の生態
堀 道雄	生態学会	ハンミョウの生態
前田 憲彦	動物学会	サケ科魚類の比較行動学
正富 宏之	ABS	ツル類の行動比較
松岡 茂	鳥学会	いかにして農作物の鳥害を防ぐか?
松村 澄子	動物学会	翼手類の音響行動
三浦 慎悟	生態学会	有蹄類の比較行動・社会
宮川 和子	動物学会	クマミミとインギンチャクの共生行動
室伏 靖子	心理学会	霊長類の行動
山岸 哲	生態学会	鳥類の社会構造
山下 恵子	応動昆	コミュニケーション論
湯川 淳一	昆虫学会	タマバエの分類と生態
吉田 真	東亞クモ学会	造網性クモ類の行動生態学
渡辺 宗孝	行動計量学会	グッピーの探索行動, ティラピアの母性行動の解析

\* ... 最終的に本人に連絡がつかなかったため、準備会のほうで記入しました。